

# 現代世界に生きる幼児と教育

——教育要領改訂案批判——

高 崎 毅

## 序 幼稚園教育要領改訂案の意味

幼稚園教育要領の改訂案は現代日本の幼稚園教育のあり方について新しい意味づけと方向づけを旨とするものである。たしかにそれは前回のものに冗漫なところをばぶき、重点が明らかにされて、目標がとらえやすくなっている。しかしこの案もやはり理想と必然と、批判と順応の妥協がその本質ではなかったか。もう一步、現代世界に生き、新しい時代を負う幼児の人間像への理想が打ち出されてよかつたのではなからうか。あるいはそのようなことは「国家」の作る教育要領に求めない方が正しいのであろうか。

### 一、生存者としての幼児

この改訂案は教育に先立つ生存者としての幼児の問題、その生命の安全と身体保護に力点をおいていることは正しい。したがって

安全教育が重要な位置を占めており、とくに交通安全が強調されている。しかし幼児の安全教育がなぜ「危険なものに近寄らない」とや「交通の規則を守る」ことだけに焦点がおかれているのだろうか。「危険であること」を判断し、臨機の処置をとれるような訓練がより大切ではないか。教育と生命の保護の間において、指導は正しくその教育的意味をさし示しているものであるべきではなからうか。

### 二、物の世界における幼児

現代人が住んでいる物の世界に対する判断では、この改訂案は一步を進めようという意図がかなりはっきりしているように思う。しかしいくつかの問題点が残っている。

現代人の住む世界はフレールベルが生き、また教育内容と想定したような自然的自然の世界ではない。しかしマスファクトゥア時代の

人間であったフレーベルは自然との技術的交渉の基礎を恩物の形で幼児教育にとり入れた。今日のわれわれはより多く技術的自然の中にいる。だからそこで「身近な」といわれる近さの遠近法（バースペクティヴ）はそんなに明らかでない。都市では自然は「再構成」されなければならないし、脱自然化された幼児にとって自然はしばしばテレビの画面や、絵本を媒介とするものでしかない。一方技術的自然の世界はそれが複雑になればなるほど、幼児にとって受身か、せいぜいボタンの操作になってしまい、同じく身近さの遠近法が狂ってしまう。だからこの二つの自然との交渉の基礎的な形を幼児教育の中に見つけることはたいへんむづかしい。われわれはいま、これらの問題の再調整の時期にぶつかっていると思うのだが、自然的自然に対する改訂案の指示は、旧要領に比べて、はるかに抽象化されており、その半面、技術的自然との交渉が前面に出ている。

しかし「身近さ」の概念が不明瞭であるため、基本的、基礎的なものと、日常手近にあるものとの区別がはっきりせず、したがって、扱い方によっては無意味な知識の集積になってしまう危険がある。

しかし改訂案が全体として事実に関心をもち、気づく」という段階をこえて機能に関心をもち、かつ操作するという段階まで要求していることは正しいと思う。この場合にも、関心の深さあるいは質の方が、もっと問題なのではあるが。

さらにこの関連で、自然の把握の基礎としての形、数、量、時間に対する強調はこの数年関心をあつめた数学教育の方法の一つの成果であろう。たしかにこれは自然との関連でも重んぜられなければならないが、幼児においては、同時に表現活動との関係で正しく扱わないと、単なる知的訓練に陥る危険がある。恩物が自然把握の基礎であるとともに、マスファクトリアの基礎、かつ芸術的表現の基礎という具体的統合性をもっていたことと考え合わせると、六領域の関連の問題をもっと真剣に考えなければならない。

も一つこの関連で問題になることは、自然に対する幼児の態度が、根本的に愛情をもって接することにあるべきか、合理的取り扱いの対象とすべきものなのかの点である。これは一応動植物と無機的自然や機械器具とによるちがいがいとして割り切ることもできる。だが、道具、材料などに対しては、これを大切にするとという立場をとるのか、どんどん消費することによって能力をのばすという観点をとるのかということになると、消費的経済倫理の幼児教育に対して持っている意味を根本的に問題にしなければならなくなる。また、身近な公共物を大切にすることも、公共性を重んずる観点からだけ問題なのか、およそ物を大切にしたり扱うことが大切なのかは大きな問題である。これらの点について、この改訂案に一貫した指導の方針がなり立っているようには思えない。

### 三、人間の世界における幼児

さらに人間の世界における幼児という問題に対して改訂案の掲げるところは、一見するとまことに立派でもっともに見えるが、よく考へるとやはり問題を感じる人が多い。

ここで幼児に要求されていることは人間の社会に生きることである、またはその能力をもつ人間になることであろう。しかしそれは同時にいかなる社会のあり方について、それが要求されているのかということも大きな問題でもあるのである。

まずここで個人のしつけといわれるものが本当に重視されるなら、欲望の充足の延期という意志の訓練を強調しなければならぬ。それに物を大切にすること、大切なものと大切でないものを区別して整理するという形に変わらなければ現代生活には意味を失ってゆくであろう。

同業関係の中で要求されていることは、役割を指導者と被指導者のどちらにもなりうることにしつけ、つまりまず言いつくされていると思うが、一番問題となるのは、年長者との関係である。

今回の改訂の主要な意図の一つはここにあったように推測できる。たしかに幼児期にはすなおに目上の人の言うことをきくことが、人間形成にとって大切なことであるにちがいない。だが、それは根本的にはそこで宮なまれる「教育関係」から生まれてくるものであって、教育関係の質の向上こそもっと重大視しなければならぬことである。このことをぬきにして、目標だけが強調されることは日本全体が古い家父長的人間関係に逆戻りする危険がある。現代

の青少年問題は親に真の権威がなくて、しかも権威をふりかざすか、あるいは逆に甘やかすかに大部分の原因があると見られるだけに、この問題には慎重なとり扱いが必要である。

一つにはここで用いられている「目上」および「敬愛」という概念が何を意味するかによって正しくもなり正しくもなくなくなるようなことなのであって、たとえば「目上」は「幼児に対して世話と指導の立場に立つ人たち」また「敬愛の念」は「信頼と愛情」というような表現に変えることが望ましい。

「国旗に親しむ」ことについてもこれが「国家」むしろ「官庁」の権威に立って要求されることに反感を感じるのは戦中派のひがみであろうか。日本の国がおのずからにして、愛され誇りにされる国となり、それゆえにその象徴が心からの喜びをもって仰ぎのぞめる日が来ることと私は期待しているのである。

この関連で一番大きな欠け目だと感じるのは、この改訂案には「幼児の身近な」ということに制限されて、新しい世界における普遍的人間関係のことに何ら目をひらこうとしないことである。

現代の全地球的(グローバル)世界、あるいは宇宙時代では、ケネディの暗殺事件も、日本の園児の悲しみでありうるのである。これはただ観念的な拡大ではなく、現代の人間は幼児期から視野を拡大し、世界的に考えられるように育てられねばならない。この狭さの欠点は基本方針中の「望ましい国家社会の形成者」という用語にも見える。世界社会における国家でありその市民であることがはっきり

りなっていないなければならない。このことは根本的にはこの改訂案が、現代の世界的視野と、本当の人間像をもっていないことから来ているのではなからうか。

#### 四、感受と表現における幼児

この問題についての改訂案の取り扱いは非常に積極的であり、進歩のあとを見せている。もちろん一部の「ゆきすぎ」をいましめることも意図しているとはいえ、この程度のことを目標とすることは充分正しいと思われる。

しかし、米岡で「自己表現」が教育上重んぜられたことが、ある人々には「行動的ニヒリズム」をもたらしたように、感じ、表現する主体の訓練が伴わなければ大きな危険があるのである。こういう観点から考えると、まず感受性の訓練として、本当に美しいもの、本当に正しいものに感動することを学ばせなければならぬ。ろう。つまり「美しさ」というような概念の内容また質が、厳密に吟味されなければならない。表面的な人間の感覚にこびるようなものに対しては引算的教育、治療教育も必要だろう。

芸術的表現について、表現そのものと、表現の技法（ここではしばしば形式主義と、放任主義が大きな顔をする）に関する指示がほとんどないが、実際はこの辺にもっとはっきりした目標設定が必要ないように思う。

人間が電子頭脳にまさる点が、創造性であるとすれば、表現

はまさに人間の創造性の訓練として考えられなければならない。それは幼児の創造性を邪魔することなく、しかも、それを助ける技術の訓練をしてやることであらうからこの点はもう少しはっきりする必要がある。

言語は社会的コミュニケーションの道具であるとともに、こうした創造的表現の大切な方法である。現代の子はこの能力には非常に優れているといわれるが、問題はその内容なのであって、ここでも「美しいもの」「よいもの」「正しいもの」の吟味が大切である。

#### 五、教育の文脈

この改訂案が幼稚園教育の文脈を家庭教育と小学校教育との関係でとらえ、これを強調したことは正しい。また個人差、地域計画を強調していることも正しい。

しかしわたしは、幼稚園教育の文脈がもっとひろく、現代の世界の本質、そこにおける自然、技術、人間関係、国家の意味、社会構造の変化、そこにおける人間がどのような生き方をするのか、そのような社会設計と関連した人間の形成か、本当の人間の尊厳と意味とどのように関係しているのかという深い洞察の上に立って、たんなる現代に有用な人間である以上に、真に歴史形成的人間として育てられることをもっと強く主張してほしかった。こういう種類の文書にそれを求めることは正しくなくて、現場の教育者がそれを本気で考えるべきことであるのかもしれないが、

（阿佐ヶ谷幼稚園）